〈巻頭言〉

どうして？ 疑問をもつことから研究はスタート

井　潤　知　美

以前、臨床研究入門講座に参加したとき、講師の先生がこう言いました。「外来や病棟など臨床現場では日々さまざまな疑問（臨床疑問）が浮かんでくるものだ、外来では３人診るごとに２つの疑問を思いつくと言われている。」なるほど。医者に限らず、心理臨床の場でも同じことが起こっているのではないでしょうか。ふりかえってみれば、私自身は、大学を卒業→臨床現場→大学院→臨床現場→大学院→臨床現場と、臨床と研究をいったりきたりしてきましたが、それも今思い返すと、私の中に沸き起こっていた“臨床疑問”が影響していたようにも思います。

しかし、疑問をもつことは専門的な分野だけではありません。小さな子どもはいつも疑問でいっぱいです。どうして海は青くみえるの？　どうして鳥は空を飛べるの？　子どもにとって世界は謎に満ちています。学校で学ぶようになるとさらに疑問は増えるはず。（もし、疑問が浮かばないとしたらそれは偏った教育なのかもしれません。）どんなに科学が発達したとしても、わかっていることほんの僅かに過ぎない、世の中はわからないことだらけ、だから面白いともいえるでしょう。

大学院で専門的な知識を身につけたとしても、疑問は減るどころか、ますます増えてくるはずなのです。ましてや、ここ数年はコロナという未知のウイルスが世界中に拡がり、これまでのやり方ではうまくいかない、知識をあてはめるだけでは解決しないことが増えてきました。知識を活用して新しい知見を創造することが求められています。

大学院では、疑問をどうやって研究という形にしていくか、その入り口を学んできたことでしょう。日々浮かぶ臨床疑問から臨床研究に結び付けること、それにはリサーチクエスチョン（研究疑問）を明確にして、それを明らかにするためにどんな研究を行っていくのかを考えていくことです。臨床の場で、日常の生活で、疑問が浮かんできていますか？

もし何も浮かんでこないとしたら、何もみえていないのか、それとも何も考えていないのか。周りをよく観察してみましょう。日々浮かぶ臨床疑問を大切にし、社会に役立つ研究へとつなげていくことを意識して続けていきましょう。その発表の場として、専攻紀要を活用してください。